

光か………暗か

障子を明けます。窓を開きます。何という美しい初夏でしょう。印刷部のトタン屋根の上の柿の木には、水のしたたるような若緑の柔かな葉が茂っています。青桐・百日紅・楓、みんな光に輝いています。大自然に濁りはありません。私の部屋にはその新緑を通して柔かな光が流れて来ます。

あなたは今どんな気分でこの『聖光』を手にして下さるのでしょうか。いま明るい心でこの私の手紙を受け取っていただけますか。それとも暗い気分で泣いていますか。あなたのお部屋は、掃除が出来ていますか。よごれていたらまず箒と打払いを持って来て、あなた自身で掃除をなさい。机をまつすぐになおしなさい。机の上をきちつと片づけなさい。机の引き出しの中の整頓をなさい。いらぬ着物がかかっていたら、それもたたんでおきます。洗濯を要する物は、洗濯場に持つて行つておきます。今日に限つて、これを読んでいる方が、文学士の御主人であろうと、高等官であろうと、男であろうと、下女を使つていなさる奥様であろうと、御自身の手でそれだけのことをなさいませ。

そうして私と一緒にお話をいたしましょう。

「人生は暗い所なのですか、それとも明るいところなのですか。」

そう言つて問う方があります。お答えいたします。世界は明るい所なのです。たゞ人の心に疑惑の暗があります。その暗い闇から光明の世界へ、悩みの世界からよろこびの世界へと生れ出づる所に、生活があり、修養があり、宗教があるので。

聖者という聖者で、光を歌わない人は一人もありません。

地軸の底から生れたような歓喜、

悲しいと思ひ、悩ましいと思ひ、憶いさえ、裏切り、はねかえす心の底からの微笑、それがあつたればこそ、聖者たちの世界に人が集つて、その人の言葉を聞き、教えを求めて慕うのです。大自然が明るいように、人生もまた明るいのが原則です。

暗黒

暗い？ それは一体、現在のなのか、過去のなのか、それとも未来なのか。

「私は過去に暗い影を持つています。」

そうです。幽霊について聞いたことがありますか。幽霊はいつも「恨めしい」と柳の陰か、陪い部屋の隅に出て来ます。そうしてきつと過去をふりむいて、残念だ、恨めしい、といつています。過去の暗い影に囚えられている者は幽霊です。

しかし申します。過去の罪悪も失敗も、一切が今のあなたによつては如何とも出来ません。駄目です。

焼けた家はその呪いで返つては来ませぬ。

過去の失敗がその暗い心で、神経過敏に愚痴を言っていることで取りかへしはつきませぬ。

過去に犯した罪悪もそれが決して、あなたのいかなるもがきによつても消えませぬ。

その他どんな過去の暗い影も、私どもの現在のはからい、もがき、心配………その他の何によつても消えませぬ。

たゞ解決は「一途」あるのみです。光を！光明を！獲得して、その燈で長い過去を照すことのみであります。

現在とは過去と未来とのつながる一刹那です。誰しも現在が暗いのです。しかしそれは過去が暗いか、未来が暗いかです。

「私の未来が暗いのです。」

それはあなたのとりこし苦勞であります。予想であります。

それならば実に答えは簡単です。それはあなたの愚さです。そんな考えを未来に對して持つことは絶対にいけません。

誰だつて明日の日に何が来るのか、それを知っている者はありません。それに対して暗い考えを持つことは、愚かなことであります。正しい認識がないからです。

徹底

前途は決して暗いことはないのです。

人生に袋町はありません。どんなに行き詰つたと思う時にも、そこに通ずる道があり、そこに生きる世界が開けます。

私は様々なことを経験いたしました。普通人が通る道とは全く違つた生き方のみして来た私は、平坦な道ばかりは通つて来ませんでした。これだけの大家族を連れてもう食うことさえ出来ないのではないかと思う日もありました。もうこれきり立つことは出来ないかと思うほど打ちのめされた時もありました。暗い、寂しい、力ない思いがおきて来ないでもありませんでした。しかし、その下から、何、出来ないことがあるか、きつと開ける、そう確信した次には、必ず思いがけない新しい世界が私を待っていました。これは単に私にだけ開けて来る世界ではありません。

行きづまつたとして、自殺することもいらなければ、夜逃げをすることもいりませぬ。

万人が万人、決して悲観する必要はないのです。誰にもきつと新しい光は認められます。道はきつと開けます。明るい考えを持ちなさい。しかしあなたはいうでしょう、それなら何故自殺などする人があるのかと。それはその人にこの自信がなかつたのです。きつと道は開け、光は恵まれるという信念がなかつたのです。それですから、自分で自分の造つた陥穽おとしあなに落ちて行つたのです。

祖先伝来の財産が無くなつたから自殺する人があります。社会的地位が亡ぼされたから。大變な不評判が広まつたから。

お待ちなさい。金や地位や名啓があなた自身ですか。一切がなくなつても、あなた自身があるではないか。

借金が出来たら、お払いなさい。支払いが出来なかつたら、心からおわびして、待っていたゞけ。

差し押えが来たら、差し押さえられたらいいではないか。

金もあなた自身ではない。地位も名誉もあなた自身ではない。

金や屋敷や、地位や名誉、それはあなたの机や衣服や座布団や帽子なのです。

帽子がとんで、頭まで棄てる奴があるか！ 座布団がなくなつて、松の木にぶら下る奴があるか！一

何？ 有島武郎の二代目ですつて。それなら好きな女と一緒に死んだがいい。

徹底なさい。どん底まで考えなさい。

何故に明日が暗いのですか、来年が暗いのですか。私のいうことをお聞きになつたら、まんざら独断でないことがおわかりだろうと存じます。

食うこと

人間は食うことが第一番です。第二番が住まうことです。第三番が着ることです。

身にはどんなぼろを着てもいられます。しかし住まう所がなくてはなりません。夏などは住まう所は橋の下でもすむ。しかし食うことだけは一日だつてやめていゝことは出来ませぬ。しかり生きてゐる以上食わないでは生きられない。それで何時食われないようになるかも知れないというのですか。その御心配もおやめなさい。まさか、東京のせちがらい所に集つて、浅草公園にごろねして「俺に職を与えよ、社会組織が……パンを与えよ……」だけで解決もつくまいじゃないか。どんな社会組織が生れて来ようと、どんな平等な富の分配がされる日が来ようと、ねている人間に飯まで持つてきて、食わしてくれる日は来ません。

親鸞・日蓮・法然・良寛……………

過去の聖者の一人でもが、食えないために餓死したという記念碑がありますか。揃いも揃つて彼らは無一物の貧者であつたのです。

しかし私には、子もいなければ兄弟もない、それに年は老いて来ましたし……わかりました。どんな世界が来ても人の心には、人の苦悩に共感する、同情心があります。年は古い、体は病んで寝ついてしまうような日……そんな人は万人に一人もないけれど……もしその時、誰もあなたを介抱もしてくれず、食わしてもくれないとしたら、よくよくあなたは悪人です。悪業の人です。謹んで死んでゆきなさい。しかし御安心なさい。そうした人のためには、それぞれ養老院も慈善病院も出来ています。

そこまで考えると、あなたにはまだ、大変な余裕があるはずですよ。そのことを今から考えて、気に病むのは愚さです。それよりも今の仕事に精をお出しなさい。世界は明るいのです。ただ人の心に暗さがあります。

浅薄な感傷主義

人生には暗い／＼影があります。

寂しい／＼暗黒の一面もあります。

ベートーベンも誰も知る天才音楽家です。然るに彼は音楽家に一番必要な耳がっ
んぼになりました。ローマ法王ジュリアス二世の乞いによつて、ヴァチカン宮殿の礼
拝堂の壁や天井に二十幾様の聖画を描いた伊太利の大画家ミケランジェロは、七年の
間に不具になつてしまつて、頸が後にまがつて脊骨についてしまいました。

正義人道のためにつくして、しかも殺された人もあります。

ましてや、一切人類は、釈尊の御教のように、ただ貪欲・瞋恚・愚痴の三毒の煩惱
に悩まされつゝ、老・病やがて死の不可思議の深淵に沈んでゆく。

確かに人生の半面には、我らをして眉をひそめて、煩悶せしめるある一面が横た
わつています。

人生は苦である。それは釈尊の第一提言であつた。しかし釈尊はそこにとどまら
れたのではなかつた。涅槃の大樂はそこに開け、仏陀としての正覺はそこに成就せら
れた。

親鸞聖人の念仏もそこに生れた。人生を真に悲しんだ聖人は、やがて大信念の世界
に出づるや、「歡喜賀慶の心」だと歌い叫んだ。

「人生は寂しい所だわね。ミケランジェロも泣いたんだわ。ダ・ビンチも寂しかつた
んだわ。親鸞も泣いたんだわ。月も涙に………スミレも寂しさに。」

やめていただきましょう。それは安価な感情陶醉です。感情の享樂です。

親鸞聖人の数行信証のどこにそんな病的なセンチメンタルな閑事があります。

レオナルド・ダ・ビンチの描いた永遠の女性、モナ・リザのどこに哀愁があります。

「人生は寂しい。人生は苦しい。」

そうした言葉も深刻に人生のある一面を表わしています。しかしそれは気まぐれ
なブルジョア娘の勝手な通らなかつた時の、わがままな感情の産物ではありません。

私どもは、青白い青年が文学のはしくれや、詩の一つも作りはじめると、寂しいと
か悲しいとか安価な感傷の大安売りをやつているのを、唾棄すべき不健全な男だと思
います。そんな人たちから「人生は暗い」と聞かされても、結構ですと言つて去つて
ゆきます。生白い日影にいないで、太陽の白熱の下に立つべきです。

安価な感傷主義を嫌います。

努力すべきです。健闘すべきです。

活眼を開け

ねぼけた眼や、血走つた眼で何が見えましょう。

眼はいつも冷たいのがいい。

まず活眼を開け。

どんなに暗いと思う境遇にも必ず通ずる一道が見える。

暴風雨にやられた闇夜の船が、岬の灯台の光を認めたように、

知らぬ旅路で親切な人に道を教えられたように、

行暮れた旅路で行手に街の燈が見えたように、

必ず光が見えて来るのが、大自然そのものの中にある人生のすがたです。

今日まであなたにだって、その経験が幾度もく／＼あつたはずです。

否現在のあなたが、その思いもうけぬ人々の恩恵によつて、生れ出たのではありませんか。

活眼を開け、世間はあなたを誤解したかも知れない。しかし正しく理解して相應以上にあなたを愛してくれる友があるではないか。感謝してもいい部分がいくらでも見えて来ます。流罪にあつたことの悲しい部分よりも、辺鄙の人々を濟度するところが出来るのを喜んだのが親鸞聖人です。

明るい心持になつて見れば、あまりに不平や愚痴を言つて、ちつとも人々に明るいものを贈つていない自分が恥かしいではないか。

覚悟をきめよ

悪い顔して部屋の隅に頭をつつこんでいるよりも、まず心を開きましよう。

深呼吸の一つもして、大自然のすがすがしい光輝にひたりましよう。

そうして明るい心持になつて覚悟を決めましよう。どん底まで徹底せよと言いましたが、明るい心で最後まで決心なさい。そうしてこれがいいと思う方向にむかつて進みなさい。

出来るか出来ないか、それを今から考えたつて仕方ありません。「あたつてくださるのです」

あたつてくだける主義の人ほど恐ろしい者はありません。人生はこの人の手にあると言つてもいいのです。一つの手段がいけなかつたら、またやり直します。そうした人にはどこかで、その人すら思わなかつた新しい世界につれて行かれます。

健闘せよ

明るい生活の第三は健闘です。七転八起の辛抱です。

少しでも名のあるような方、出世した人、立身した人、徳のある人になつた人、全て何かを成就した人で辛抱しなかつた人は一人もありません。

人は榮躍榮華の出奔る身分に生れさえしたならば、すぐ幸福だと思つたら大まちがいであります。

着たいものを着、食いたいものを食い、何不足なく暮せる人にとつては富貴はさまで幸福とは思われないのです。

しかるに一日中、汗にまみれて働いた者にとつては、夕方一家族そろつてお野菜に麦飯だけでも、その中に無限の快樂を感じます。

塩さばに酒一本、贅沢になれた紳士にとつてはそれは何等の快樂ではありません。しかし田植に忙しかつた農夫の方たちにとつては、それは実に百味の飲食にまさります。

まことに堅実なよろこびはただ辛抱して働く者にだけ味わうことがゆるされてあります。

働かない者、辛抱しない者は、常に味の濃い遊びごとを、ことさらしなければ楽しみを感じません。

あの都会のカフェーの空気、活動映画……その他の娯楽物がどんなに息づまるほどの不堅実な濃厚さを持っていますか。

真の楽しみは唯、労苦の結果です。勤勉のたまものです。思案に精出して働きましょう。私を明るくするには必ずしも金殿玉楼はいらないのです。

唯苦の境地に立つて、辛抱することです。明るい世界はその中に開けて来ます。

まかせきれ

まことに私を明るくしてくれる世界は、私の全てをまかせきることでもあります。あなたに我をまかせきるとは信仰の世界であります。

何もかも私の全てをあげておまかせします。私の過去も、私の現在も、私の未来も、私の罪悪も、私の苦しみも、その他、私の一切をあなたにまかせきります。

終日働いた者にとつては寢床に入ることは嬉しいことでもあります。

夜が来ました。

「坊や眠いか休んだがいい

嬢や疲れたか寝たがいい

心静かに安らかに

体を自由にまかせきつて

眠れ！ 眠れ！ 深く眠れ！

心の汚れが洗はれる

体の疲れが除かれる」

眠る時、誰が、私のために、はからいましょう。全てをあげてまかせきります。足も手ものばしきつて。

しかし、まかせよとは眠る時だけではありません。昼のまつただ中、汗ににじんで働いている時でも、どんなに行き詰ったと思う時にでも、私は私の最善をつくして、あとはあなたにまかせます。

三度の食事が与えられます。健康な体があります。明るいみ光にまかせきる者にとつては一切は私の問題ではありません。

しかし病む日もあります。苦しい時には苦しいのです。苦しみつっ、もがきつつ、あなたのみ手のうちにあります。

私の暗くなりそうな心を裏切つては、明るい力がこみあげます。あゝ、我がありたけをあなたにまかせきります。

人を愛せよ

いがみあつている心を反省しましょう。

憎みあつている心を懺悔しましょう。

そうして愛しあつてゆきましよう。

誰にでも悪もあります。欠点もあります。許しあつて行きましよう。

ゆるしあう心がおきた時、明るい心持になられます。

汽車にのる。たくさんな人が、おしあいせぎあつて戦場のように、他人のように、いいえ敵のように。

「一切の男は我が父なり、一切の女はわが母なり。」
それは積尊のみ心であつた。

「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。」
それは親鸞聖人のみ言葉であつた。

「坂の車」

わずか押しても動き出す

行きづまった涙の日

温い一言が一生を支配する

つまづいた友に同情せよ

疲れて帰る夫に同情せよ

戦いに破れた悲境の人に同情せよ。

しおれた草も根に与えた水に蘇り、

人も情の木蔭に甦る。」

行きづまった友にとつては

「なに心配せずしつかりやりたまへ、君にはもともとやれる天分があるのだからね。」
たつたその一言さえ涙のにじむほど有難い。

「曲芸を見る」

猿が自輶車に乗り

オットセイが君が代を奏す。

あなたのつかえる姑が

あなたの教える不良児が

まさか生来の鬼でもあるまい。

山羊に曲芸を教える心

オットセイに綱渡りを教える心で

通らぬことがあるものか。

足りないのだ

まだなのだ

愛の力 眞実の力」

光の世界は温かい、温い世界は明るいものです。

明るくて温い世界にだけ草木だつて育つてゆきます。伸びてゆきます。

結論

一、活眼を開け、見えなかつた世界が見える。

二、覚悟をきめよ、力が生れる。

三、覚悟が出来たら健闘せよ、辛抱せよ。

四、努力することは汝の領域でも、その結果がどうなるかはまかせきれ。信とはまかせきることだ。

五、大慈悲のみ心に生きつゝある者は一切の人を愛して行きます。

かくして明るい世界は我らのものでなければなりません。

愛するだけで明るかったら、我が子を抱いて水に飛び込む男はいませぬ。努力しても一切をまかせきることを知らねば、思う結果が来ない時には愚痴のみの人になります。辛抱しても愛の心のない人の世界はただ貪欲の牢屋になります。

明るい世界へ、光明の天地に！ 大自然のすがたのままに。春の日の若葉の如くのびにのびてゆきましよう。(五月十五日)

世相のままに

東京のある所で白昼強盗がある家におしよせた。昼のことだからすぐ人が二三十人集った。強盗は悠々と構えて「近よるとぶつた斬るぞ」と剣をふつて見せつつ、出てゆくと民衆はわいわいと後を追う。一人の憲兵が来た。捕らえようとする。「憲兵に警察権があるか」とどなったが、難なく捕らえられた。彼曰く

「俺は××大学の卒業生だ。俺はある金持の息子だが、一度放蕩になると親は金を送らぬ。やむなく一度悪事を働いて前科者になると誰も使つてはくれない。飯が食えないから、俺は強盗をやつたのだ。一度前科者になると使つてくれない社会は、その社会組織そのものが……我ら無産者にとつては……。」

こんな男は食えないのが当然であるかも知れない。

「生産しない者は消費してはならない」といつつ、生産はちつともしないで、親の学資を使ってカフェーで遊ぶ。厳密な意味で、生産者のみが消費者であり得る社会が来たら、面白い音楽を聞かしてくれる音楽家もいなければ、たかい詩を聞かしてくれる詩人もいなければ、美しい絵をたつた一枚、一生涯に地上に残す画家もいない。一つの真理発見のために幾十年書齋に頭をつつこんでいるニュートンのような男もいなければ、ロダンのような彫刻家もいない、おかしき殺風景な世界が来ようじゃないか。

春が来れば一陽来福で、どんなものでも生きかえる。植木をすればこの頃だ。接木をしてもよくつく、猫も杓子もみな生きる。しかし夏が来ると弱い奴は死んでしまふ。早天が続く、弱い奴から枯れてしまふ。秋が来ると又蘇る。病人でもほつと一息する。冬が来る、虫がばたばた死ぬる。弱い奴から死んでゆく。蟻は地下で生きてゆくが、舞うて狂うて遊んだ胡蝶は死んでゆく。

金の洪水が日本におしよせると、不正な奴も、正直な商店も、成金・成金・成金が一ぱい出来る。不景氣が来るとばたばた不健全な奴から斃れてゆく。不景氣が来ると一獲千金の夢が消えて、一円くれたら一日を費しても行つて来る。不景氣が来るとはいいことだ。冬があり夏があるようなものだ。万人の血をしぼつて榮華に生きるような奴は、はしからばたばた斃れるのがほんとうだ。

何がどうなつても地上が浄土にはならない。罪悪や、苦惱の根がなくならないのなら、何をどうしても駄目だと、自分の生活も社会生活もなげやりにしてしまふのは、生活を持たない「死人」である。

永久に悪や汚れや暗黒の火の手が消えない火宅だからこそ、生き甲斐もあり、道もあり、奮闘もあり、生活もあるのだ。地上は面白いところなのだ。

亡びる者は亡びて丁度いいのだ。盛になる者は盛になるのが丁度いいのだ。盛になつたつて衰える時もあるのだ。衰えたつて盛になることもあるのだ。

放蕩息子が出て親譲りの財産を殆んどなくした。それを見て何故悪く言うのだ。誰も田を売ってくれないとこぼしていた者が、おかげで田地が手にはいつたではないか。

金ツマリ病の手術は放蕩息子がする。金持は千万年金持で、貧乏人は何時までも貧乏人では困る。たおれる者はたおれた方がいいように出来ているのだ。釈尊を生んだカピラ城だって、釈尊のまだ御在世に亡んだじゃないか。

世の中が固定したら面白くないが、動いているから面白いのだ。文化住宅地を見たように、どの家もどの家も同じ寸法でおなじ向きで、同じ間取り、あんな人生は嫌だね。富を平等に分配して、同じような四角四面な世界でも出来たら、生きていることは真平だ。

春が去ったら夏が来る。いつまでも夏ではない。秋も束の間で冬が来る。雨天があれば必ず晴天がある。気候や天気だつてそれだから、人の身の上にも苦しい日あれば楽しい日もある。同じことが続きはせぬ。

伸びられる日は伸びておけ。忍ぶ日には忍ぶのだ。

主人になる日もあれば、お客になる日もある。

泣く日もあれば笑う日もある。

行詰つたと悲観すな、じつと耐えていたら、行詰りの中から開く道がある。伸びるだけでは進めないのが尺とり虫である。屈するのは伸びるためだ。忍ぶのは、そのまま、最上の努力である。

蛙は蛙で鳴いたらいい。鷺は鷺で鳴いたがいい。無産者は無産者で叫んだがいい。資本家は資本家で最上に生きよ。

具体的な人生はそのどちらでもない。

こちらの家の風呂では「熱いぞ水を送れ」とどなり、こちらの家では「まだぬるいぞ、火をたけ」とどなる。熱い者は熱いのだ。冷たいものは冷たいのだ。皆に「熱いと言え」と言つても駄目であり、皆に「冷たいと言え」と言つても駄目である。

熱い者が何時までも熱いことはない。冷たい者が何時までも冷たいことはない。熱くなくなつたのにまだ熱いと言つていたり、自分は冷たいと思うのに、熱いと言つていたりすれば、とんだ間違つた世界が出来る。

心の改造がほんとうだと信ずる者はそう説いたらいい。

客観界の改造が必要だと考える者はそう説いたらいい。

そのうちに時が全てを解決するのだ。

ただ衷心の生命の叫びのみが何かを地上に残すのだ。

衷心の叫びを忘れて、大きな声の方について流れる大衆には救われる日は来ない。

動く世相を肯定する。大信念の中で受け取るのだ。

亡ぶ日には亡ぶことを受け取るのだ。

盛んになる日には盛んになる中に生きるのだ。

道はどちらにもある。

好きなことばかり受け取つて、嫌なことを受け取るまいとしてもそれは出来ない。一切をありのままに受け取ることが出来るやうでむずかしい。子供がお人形一つこわした時、その親が子供に何と言つたか。皿一つ下女がこわした時、奥様が何と言つたか。

念仏禁制の札が立つて、流罪にあおうとした時、法然上人が何と言つたか、「たとえ死罪に行はるゝと雖も念仏を停止すべからず。」念仏すれば流罪は受け取らねばならぬ。親鸞聖人にとつては「是れなほ師教の恩致なり。」ではなかつたか。

どんなことだつて受け取る気になれたら、世の中は広くなり、生きる世界に碍げはなくなる。

どんな鬼にだつて誠をもつて行つたら仏のようにやさしうなる。

誠が足りないのは言わないで、相手が鬼だと劍を持つて行けば一層鬼になる。その鬼が劍のかわりにかみつきはじめる。

活動映画はここ二三年幕末物でもちきりである。

佐幕派と勤皇党、動く流れは一つである。

近藤勇が持つ一本の刀で人は幾人でも斬られる。しかし人はいくら斬つても思想の流れは斬られない。坂本龍馬も斬られた、青田松蔭も斬られた、高杉普作も斃れた。しかし勤王・王政復古の大潮流は流れきつて明治維新は生れた。

しかり、思想の潮流は何ものをもつても斬られない。

日本の現在、いかなる思想が流れつつありや。

簡単な頭の持主があつて、キリスト教の講演のピラを破つて歩く者がある。仏教の講演のピラをはいで通る男がある。そんなやり方を野卑な反動というのだ。男子ならば堂々と戦つたがよい。たとえ、主義主張は通らなくても、大西郷は大西郷であり、白虎隊は飯盛山のあらん限り、赤い血の持ち主として百世にかおる。

正しいか、正しくないか、それは唯、時の流れが解決する。

失恋の極、一生独身を誓つた男も、十年たつたら三人の子供の父であり、独身を誓つた女も五年たてば「やはり縁ですね」と新しい男の妻となる。

人間はそれで精一ぱいなのだ。

時の流れが解決する。

君の主張が正しいのか、

僕の意見がほんたうなのか、

お互に力一ぱいやろうじゃないか。

どちらにも賛成があるとすれば、思い通りやる外ないのだ。

一切は時の流れが解決する。

おゝ偉大なる哉、時の流れ。

活眼を開いて天地宇宙の真相を正視せよ。

満開であつた桜の花は今いづこに、

花も恥らう処女の日の美しさは今いづこ、

汝が熱血をしぼつて争鬪をつゞけた敵やいまいづこ、

日露戦争はいづこに、世界大戦乱は今いづこに、

戦役記念碑は公園の装飾の一つにすぎんではないか。

ぼろりと落ちた前歯一本、再び汝の物ではない。

大無量寿経に曰く

「一切の法は猶し夢・幻・響の如しと覺了すれども

諸の妙願を満足して、必ず是の如きの刹(浄土)を成ぜん。

法は電影の如くなりと知れども菩薩の道を究竟し、

諸の功德の本を具して受決して常に作仏すべし。

諸法の性は一切空・無我なりと通達すれども、

専ら淨き仏土を求めて必ず是の如きの刹を成ぜん。」

これ仏国土を成就莊嚴しようとする菩薩の願心ではないか。

一切の法は、夢なるが故に、幻なるが故に、響の如くなるが故に、無自覚なる者は罪惡より罪惡に、自己を偽り、世間に飾つて時の流れに従つて墮落する。

自覺めたる者は、諸行無常にして、電光朝露、夢幻の世なるが故に、つとめて精進求道に生きるのではないか。

夢の如く、幻の如く、移り變つて動かぬ日とてなく、変化せぬ時とてないが故に、つとむる者は向上し、なまける者は墮落する。

一念！ 鬼も仏に變るべし。

一声！ 生死も浄土に變るべし。

さめよ！ めぎめよ！ 諸行無常なり、一切空なり、しかも天地嚴然として存在し、その間、我、人として瞭然こゝに喜怒哀樂をつゞけている。

生きることは喜びである。

救われたる者にとつては、煩悶は單なる煩悶にあらずして、道を念ずる思慮に外ならず。

苦戦惡鬪も来れかし、單なる惡戦苦鬪ではなくて、快心の笑をもらしつつ、健闘をつゞけるのに外ならない。

世相をだきしめて、信念に生きる。如来と煩惱の一体なる燃焼、それを仮に我となづける。

「出かけて行つて来なければならぬがなあ。」

外に雨が降つて風が吹く。

どうしても行かねばならない。

怠儀である。出るのが辛い。何時までも、ぐづくする。それでは解決がつかない。

決心して出たがいい。出て見たら、もうそれだけ苦しいものではない。徹底するところが一番だ。

「あなたはどんな男性を好みますか。」

そうひそかに女性にたづねて見なさい。

女性は即座に「男らしい男です」と答えるでしょう。

男性らしい男性とは、徹底味を有する男のことでしょう。

白は白、黒は黒と、きつぱりした決断力と、明らかな行動をする男性のことである。迷うという言葉は、不徹底な世界にあることである。

悲観する者は、小さい悲観では駄目である。徹底的に悲観したがいい、そうして底をぶちぬいたがいい。

大聖釈尊は、生老病死の人生の大事実にぶつかるとや真に悩まれた。王宮も捨て、妻も捨て、子を捨て、一切を捨て、徹底的に精進求道せられた。その徹底的な大悲観の中から、やがて世界の大救世主としての大覚が生れた。徹底せる大信念が生れて、老病死の苦をうち破つて生きぬく金剛の法身を体現せられた。

親鸞聖人は徹底的な信仰に生きられた。

生半熟に自分の上に神性や仏性を肯定せず、「いづれの行も及びがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし。」の一語を残してきつぱり、比叡山二十ヶ年の聖道型の修道を棄ててしまわれた。

「地獄は一定すみかぞかし」

「たとひ法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候」

「親鸞は父母の孝養のためとて一遍にても念仏まをしたることいまだ候はず」

「親鸞は弟子一人ももたず候」

以上のお言葉のすべてが、いづれも徹底した世界でなくては出ない言葉である。その一つ一つが浅薄な常識を裏切っているばかりでなくて、折衷や妥協やごまかしがちつともない。全ての言葉が、とことんまで徹底せる世界を表わされてある。

徹底した人生観のある所に徹底した自覚が生れる。徹底した信念と生活が生れる。